

聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第6章 預言者における祈り①



イザヤ

神に選ばれた預言者たちは、神から語れと言われた言葉をそのまま語っていました。そのため、彼らは必然的に祈りの人でもありました。小預言書の中には祈りへの直接の言及が見られないものもありますが、彼らが神に語りかけ、神のお言葉を直接に聴いていたことは明白です。この章では、これら神の特別な使者たちの歩みにおける祈りの中でも、特に重要な事例を見ていくことにします。

イザヤ

預言者たちのプリンスであるイザヤも、祈りについては語るべきことが多くありますが(イザヤ 1:15、55:6-7、62:6-7 を参照)、実際に記録されている祈りはごくわずかです。神の聖さについての並外れた啓示(イザヤ 6:1-4 を参照)をいただいた直後のこと、イザヤと神の間には次のようなやり取りがなされました。

そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」

すると、私のもとに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった。彼は、私の口に触れて言った。「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」

私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」すると仰せられた。「行って、この民に言え。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見ず、自分の耳で聞かず、自分の心で悟らず、立ち返っていやされることのないように。」

私が「主よ、いつまでですか」と言うと、主は仰せられた。「町々は荒れ果てて、…まで。そこにはなお、十分の一が残るが、それもまた、焼き払われる。テレビンの木や榎の木が切り倒される時のように。しかし、その中に切り株がある。聖なるすえこそ、その切り株。」(イザヤ書 6:5-11,13)

この箇所は、語りと祈りが混ざり合ったものとなっています。ここに記録されているのは、人が神の啓示をいただく際には必ず起こるはずのものです。人は祈りを通して畏れを覚えるほどに神を認識することがありますが、それが起こると、ここでのイザヤのような反応を見せて当然なのです。暗いところの全く無いお方のご臨在の中にあっては、軽薄さや不遜さの入り込む余地は全くありません。神なる方の恐るべき光は、ほんの少しの暗闇さえも明るみに出し、人をして「私は、もうだめだ」と叫ばせるのです。

まさにこの神のご臨在の中で、有限な人間は①罪を示され(5節)、②罪がきよめられ(6-7節)、③働きに召される(8-9節)のです。魂のきよめに続いて起こったイザヤの献身の祈りは、神からの召命に向けての基礎を据えるものとなりました。「行って、この民に言え」---天からの使命に向かう道を整えてくれるのは、従順な思いときよめられた心です。それは困難なメッセージでしたが、希望がありました。「聖なるすえ」という残された民を、神はご用意だということです。

イザヤはまた、私たちに、讚美の祈りの模範を与えています。これは、約束がまだ成就していない時に、苦難に耐えている最中に捧げられた讚美でした。讚美の祈りは、嘆願する者の信仰を励ましてくれると同時に、ふさわしい形で神に栄光を帰すものとなります。私たちの祈りの生活を測る物差しの一つが、このイザヤが語った感謝と讚美のような内容をどれほど含むものとなっているか、ということなのです。

主よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。…それで、力強い民も、あなたをほめたたえ、横暴な国々の都も、あなたを恐れます。あなたは弱っている者のとりで、貧しい者の悩みのときのとりで、あらしのときの避け所、暑さを避ける陰となられたからです。…万軍の主はこの山の上で万民のために…宴会を催される。…神である主はすべての顔から涙をぬぐい、…その日、人は言う。「見よ。この方こそ、私たちが救いを待ち望んだ私たちの神。…その御救いを楽しみ喜ぼう。」(イザヤ書 25:1,3-4,6,8-9)

イザヤは、この讚美の祈りによって、祈りにおいて主をあがめるという点において、私たちに素晴らしい模範を残してくれています。「主をあがめることで、人は即座かつ直接に、主人に対するしもべの役割、創造主に対する被造物の役割において、神との接触が始まる。したがって、主をあがめる祈りは、他のあらゆる種類の祈りにとって、根本的なものなのである」。かくして預言者は、過去における神のみわざと未来における勝利とをほめたたえる聖歌隊のリーダーとなります。契約を守られる神が過去から貫いてこられているお姿こそ、未来にどのような方となられるかの保証となっているのです。

イザヤは、自分の讚美の歌の一つに、ストレスや苦難の中にある信仰者のための励ましの言葉を含めています。このような時にある信仰者は、神が完全な平安を与えてくださることを確信しなければなりません。

志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです。…義人の道は平らです。あなたは義人の道筋をならして平らにされます。主よ。まことにあなたのさばきの道で、私たちはあなたを待ち望み、私たちのたましいは、あなたの御名、あなたの呼び名を慕います。私のたましいは、夜あなたを慕います。まことに、私の内なる霊はあなたを切に求めます。あなたのさばきが地に行われるとき、世界の住民は義を学んだからです。…主よ。あなたは、私たちのために平和を備えておられます。私たちのなすすべてのわざも、あなたが私たちのためにしてくださったのですから。(イザヤ書 26:3,7-9,12)

福音的な預言者と呼ばれているイザヤは、個人的な体験と願いの中から祈り、神に向けられた思いの中から祈り、全ての人々が義を学ぶようにという深い望みの中から祈りました。彼は、「義は平和をつくり出し、義はとこしえの平穩と信頼をもたらす」(イザヤ 32:17)ことをよく理解していました。

しかし、どれほど誠実に主の御顔を求めていても、神が沈黙される時期を体験しない人はほとんどいません。天が真鍮のようで、助けを求める切実な叫びが神の耳に届いていないような時です。ヨブもそのような時を体験しました。「ああ、私が前へ進んでも、神はおられず、うしろに行っても、神を認めることができない。左に向か

って行っても、私は神を見ず、右に向きを変えても、私は会うことができない」(ヨブ 23:8-9)。このような時には、神に見捨てられてしまったかのように思われます。事実、神の御子においても同様の時がありました(マタイ 27:46 を参照)。しかし、私たちが確信できるのは、神のなさるあらゆることは、その不変の愛と矛盾しないという点です。神はただ、私たちの刈り込みをし、きよめてくださっているだけなのです。神の鍛錬は、ご自分の民への情熱と、祝福しようという決意を、無に帰するものではありません。国としてのイスラエルもまた、神の沈黙を体験しました。それはイザヤが、記録されている最後の祈りを捧げた際のことでした。

どうか、天から見おろし、聖なる輝かしい御住まいからご覧ください。あなたの熱心と、力あるみわざは、どこにあるのでしょうか。私へのあなたのたぎる思いとあわれみを、あなたは押さえておられるのですか。まことに、あなたは私たちの父です。たとい、アブラハムが私たちを知らず、イスラエルが私たちを認めなくても、主よ、あなたは、私たちの父です。あなたの御名は、とこしえから私たちの贖い主です。

ああ、あなたが天を裂いて降りて来られると、山々は御前で揺れ動くでしょう。火が柴に燃えつき、火が水を沸き立たせるように、あなたの御名はあなたの敵に知られ、国々は御前で震えるでしょう。… 私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、私たちの咎は風のように私たちを吹き上げます。しかし、あなたの御名を呼ぶ者もなく、奮い立って、あなたにすがる者もいません。あなたは私たちから御顔を隠し、私たちの谷のゆえに、私たちを弱められました。

しかし、主よ。今、あなたは私たちの父です。私たちは粘土で、あなたは私たちの陶器師です。私たちはみな、あなたの手で造られたものです。主よ。どうかひどく怒らないでください。いつまでも、咎を覚えなさい。どうか今、私たちがみな、あなたの民である」とに目を留めてください。

主よ。それでも、あなたはじっとこらえ、黙って、私たちをこんなにも悩まされるのですか。(イザヤ書 63:15-16,64:1-2,6-9,12)

これらの願いは、国全体の心の叫びを言葉にしたものとなっていて、単独の預言者の祈りというよりは、国としての祈りの様相を呈しています。「ああ、あなたが天を裂いて降りて来られると」(64:1)のくだりなど、特に後半部分には情熱が感じられます。この願いは、天に住まわれる神が、壁を破って、地に自らの力を示してくださいようにというものでした(64:1-3 を参照)。このような激しさは、神の子どもたちにとって、常にふさわしいものなのです。

このような情熱的な祈りは、霊的な洞察と天啓の扉を勢いよく開き、眼前にある圧倒的な状況の根本原因を示唆するものとなるでしょう(64:5-7 参照)。今日のリバイバルが必要とされている状況は、紀元前 8 世紀、7 世紀の時代に信仰復興が求められていた状況と何ら変わりません。世界中の教会がイザヤのように祈るのは、まさに時宜にかなったことなのです。

人々の心が聖霊によって探られ、光が照らされるなら、救いを求める時は既にそこまで来ています。罪の確信が与えられるとはいっても、それは決して、負うことのできない、逃れることのできない重荷を押しつけることが意図されているわけではありません。むしろ、それは悔い改めと信仰の刷新に導くものとして意図されているのです。イザヤの祈りは、神とその民との適切な関係を正しく認識することで締めくくられています。私たちは主なる陶器師の御手の中の土くれであるべきなのです(64:8 を参照)。



質問

- 1 イザヤ6章の語りと祈りを見ると、神の臨在の中で、有限な人間がどのようなことを経験するとわかりますか？
あなたはイザヤと同じような経験をし、イザヤと同じように反応したことがありますか？
- 2 イザヤの讚美の祈りはどのような点で私たちの模範になりますか？
祈りにおいて主をあがめるとどのようなことが起こりますか？
あなたは祈りにおいてどのように主をあがめていますか？
- 3 イザヤの讚美の歌の一つには、ストレスや苦難の中にある信仰者のためにどのような励ましが含まれていますか？
あなたはストレスや苦しい状況にあるとき、どのように祈りますか？
- 4 誠実に主の御顔を求めていても、神が沈黙される時期を体験しているとき、私たちは何を確信し、どのように考えるべきですか？あなたにも、神に見捨てられたかのように思ったことがありますか？そのとき、あなたはどのように祈りましたか？もしそういうことがあったら、どのように祈りますか？
- 5 イザヤの情熱的な祈りから、今日、リバイバルを求めて私たちはどのように祈る必要がありますか？
- 6 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？ どんなことを実践したいと思いますか？



祈り

天の父なる神さま。あなたをほめたたえます。あなたを讚美します。たとえ、あなたが沈黙しておられると思えるときでも、あなたの不変の愛を信じて祈ります。あなたが力を地に示して下さり、すべての人があなたを知るリバイバルを起こして下さることを求めて、熱い心で祈り続けます。主よ、どうぞ答えて下さい。